

岐阜大学工学部 正員 加藤 晃
 岐阜大学工学部 学生員 ○堀田秀次

1 はじめに

Kevin Lynchは人間にとって快適な都市とはイメージアビリティの高い都市形態であるとし、都市に対する市民のイメージを分析することにより、快適な都市とはどんな都市であるが考察した。⁽¹⁾本研究はLynchの基本的概念を基礎に、岐阜市、高山市において都市景観に関するアンケート調査を行い、Semantic Differential法による都市景観の評価を試みるものである。

2 アンケート調査によるイメージの分析

調査は、岐阜市の場合、岐阜大学生78人、岐阜短大生119人、高山市の場合、高山短大生41人、一般市民93人に対して行った。この調査は、①Lynchの概念がこの両都市の場合どの程度あてはまるか、②彼の分類項目がこの両都市にもあてはまるか、③日本独自の都市のイメージのエレメントは存在しないか、の各項目について考察した。この調査を行うにあたり本研究では二つの仮定を設けた。それは人々にイメージされるのは特徴ある景観で、良い印象を与える景観あるいは悪い印象を与える景観の両方である。また、「良い（悪い）景観」は「好き（嫌い）な景観」と置き換えてもほぼ同じ意味を持つ。アンケートの内容としては、地名・エレメントの選択枝、地名の参照としての地図を添えて、「良い都市景観」「悪い都市景観」を構成していると思われる地点をそれぞれ5ヶ所選ばせ、その各地点で強いエレメントと思われるものを選択枝より5つづつ選ばせた。

岐阜市の結果について「良い」「悪い」の各上位3地点を表1に示す。

この結果として、都市を構成するエレメントは

表-1

「良い」		「悪い」	
1	長良川から金華橋にかけての北岸 川べり、橋、山 スカイライン、広場	1	西柳町瀬 ネオンサイン 商店街 広告 テーガード ビル
2	岐阜公園から護国神社にかけて 山 神社 広場 スカイライン、遊歩道	2	駅南口 ネオンサイン 広告 大きな目立つ建物 商店街 街路
3	長良橋からグランドホテルにかけて 川べり 山 橋 スカイライン 遊歩道	3	問屋町 住田町付近 商店街 広告 街路 テーガード 電柱

Lynchが分類した5つのエレメントに含まれることが示された。このことは同時に高山市についても成立した。新しいエレメントとしては、スカイラインが都市景観に非常に効果的であった。山地に近いこの両都市では山は身近な存在である。山々が空を切るスカイラインは一つの新しいエレメントと考えられ、Lynchの5つのエレメントに加えるかどうかの問題が生じる。Lynchは大きなビル群が形成するスカイラインは5つのエレメントの中のエッジに分類しているが、ここでのスカイラインは山々が形成するものを考えている。また明確には現れなかったが、土地の起伏も重要なエレメントだろう。これらのエレメントの分類、分析にはさらに調査を行っていく必要がある。

3. SD法による都市景観の評価

アンケート調査と同時に、両都市の都市景観について表2に示すように22個の対象について、非常に良い、やや良い、普通、やや悪い、非常に悪いの5段階尺度に従って評価をもらった。5段階尺度を距離尺度とみなし[-2,2]の整数値を

表-2

- 1 道がわかりやすい
- 2 街並がよく統一されている。
- 3 街並に特徴・個性がある。
- 4 街に落ち着きがある。(騒々しくない)
- 5 広告・ネオンがけはけはしくない。
- 6 神社・仏閣は宗教的な雰囲気がある。
- 7 歩いていて変化する景観が美しい。
- 8 歩いていて危険な感じがしない。
- 9 街路樹がよく調和している。
- 10 背景の山々が美しい。
- 11 街にエネルギッシュな魅力がある。
- 12 色彩が豊かではなやかである
- 13 起伏にとんでいて 変化がある。
- 14 街ごとに気のきいた喫茶店・ブティックなどがある。
- 15 川の美しさが活かされている。
- 16 川に親しみがあがる。
- 17 スカイライン(山や建物と空のつくる線)が美しい。
- 18 街にダイナミックな活動感がある
- 19 街並に親しみがあがる。
- 20 街がよく清掃されている。
- 21 街全体が明るい。
- 22 街が整然としている。

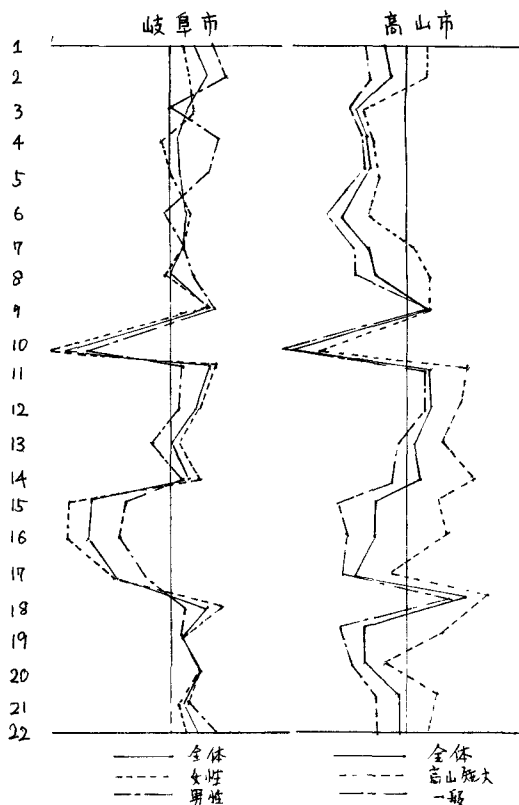


図-1

あてはめ、これを変数と考え各2変数間の相関係数行列を算出し、バリマックス法によって軸の回転を行なった結果、5つの因子軸が抽出された。

しかし、5つの因子軸による寄与率は岐阜市43.2%、高山市47.9%とそれ程高くなかった。高山市について表3のように分類した。また図1に示すようにプロフィール曲線を作成し、そのパターンの類似性、評価のばらつきを視覚的に分類した。しかしここで問題となるのは、都市景観は非常に多くの要因の複合体だと考えられることであり、調査対象者が与えらるすべての要因を5段階尺度に従って評価し得たかどうかである。

表-3

I軸	活動性	18, 14, 11, 12, 13
II軸	調和性	9, 7, 3, 2
III軸	自然地形の要因	16, 10, 15, 17
IV軸	健康性	21, 22, 20, 2
V軸	落ち着き、安全性	4, 5, 8

4 結論

Lynchの5つのエレメントは原則的には日本の都市景観上にあてはまった。また、SD法による評価では前記のような結果は得られたが、必ずしも十分な都市景観を評価できたとは考えられず、他の評価法を加えた複合的な評価が必要となろう。また本研究の問題としてデータの歪みが生じられる。それは調査の対象が、岐阜市の場合岐阜大学と岐阜女子短大の学生だけで、高山市の場合も高山短大の学生が半数近く含まれており、限られた年代層になってしまった。また学生は生活圏が片寄っているため、景観の評価が一定の場所、事物に集中する傾向が現れた。岐阜市について一般市民を対象とした更に詳しい調査を実施して分析を進めていく予定である。

<参考文献> (1) Kevin Lynch; The Image of the City
丹下健三他訳 岩波書店 1969年